

御嶽大神様とのご縁

東村山壹基督講 齋藤光倫

春冬混合の今日この頃、御嶽大神様に、直接の代表役員様始め、各役員各位様、各講社の皆々様の、日々の御健勝と御隆盛を心よりお慶び申し上げます。

私共、東村山壹基督講は、御嶽大神様に、講として、ご縁を結んで頂いた当初の事は、何一つ古文書もなく古い歴史の事とは言え、江戸時代からかなと推定するのみです。現在、東村山市野口町が中心ですが、古い歴史の中に、神奈川に所属し、野口村と称する時代、最初の御師様は、瀧本坊、斎藤宅にお世話になり、私共隣近所農家一色の村、戸数も少ない、僅か十二軒で壹基督講を結成したと思われまます。毎年代表（徒歩草鞋履）にて登山、宿坊に一泊（お籠り）翌朝御大前にて、祈願を済ませ、大口真神様の御分神を御壺体拝借し、各講員宅に持参、講員各々奉齋し（屋内又は屋外）壹ヶ年間の守護をお願いして参りました。翌春の登拝時に、新旧御分神を交換し、今日迄続いております。

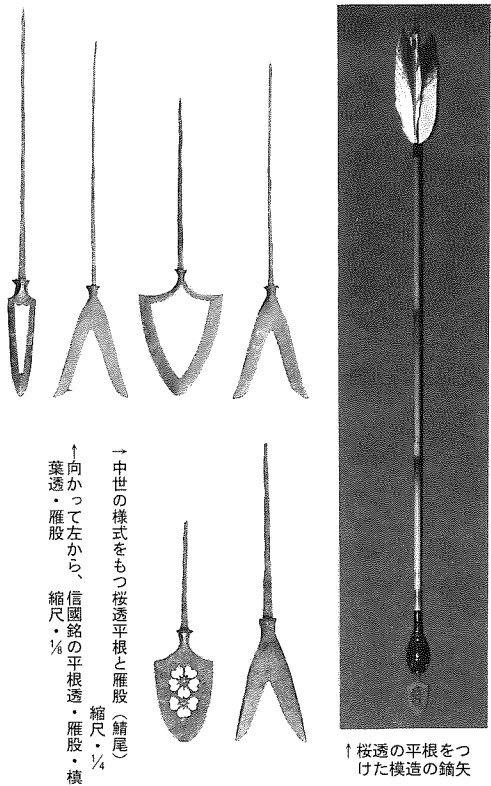
昭和四十六年、故在って、府中大国魂神社の仲介を得て、現在齋館宮司久保田方に移り、既に二十七年経過いたしました。お陰様で、尊い御神徳の基を始めとし、各講員の親祖様の恩、師の恩、社会の御恩、身近な人様の恩恵を頂いて、戦前戦後を通じて今日まで、世相の荒波の中にも、実に幸な日々でありますことが感謝一杯でございます。そして、私事、日々無償の働きに喜びを感じさせて頂けまますこと、最上の幸でございますことを痛感しておりますことをご報告させて頂きまます。御嶽大神様に御縁を結べる各位様のご家庭に、幸の和風が隅々まで流れ入らむ事を御祈り申し上げます。

武蔵御嶽神社宝物シリーズ8

鏃

日本風俗史学会会員 齋藤慎一
青梅市文化財保護審議会委員

御嶽の鏃は、古く享保四（一七一四）年十一月の武州御嶽権現御内陳御神寶目録之事（金井家文書）に「根矢（鉄鏃）六本」「内平根一本、□□一本、鯖尾脱四本」と記録される。明治二三（一八九〇）年、川崎千虎の調査書にも、六本の鏃と、鏃のつく矢筈（矢篠）六本の寸法が報告されている。このように六本の鏃は神宝と



生（八幡宮へ上矢の鏃矢を奉った。太平記・卷十一・筑紫合戦では、菊池武時が上差の鏃矢二本を、櫛田の八幡宮の神殿の扉に射立て、神威を退けた。 箆に二十四本ほど盛る通常の細根鏃の征矢に対して、鏃矢は大事な、神聖な、威力ある矢であった。 この鏃矢の鏃は、平たく尖った平根か、平たく二股に尖った雁股、鯖尾である。平た

いから、武器としては切れく力があり、矢筈につく矢羽は、征矢の三枚・三立羽に対して、四枚で弾道状に旋回せず飛ぶ四立羽である。 これら御嶽の鏃は一本だけ槇葉という細根型の鏃だが、蝮姑首下（根元下）での幅2.9cmもあるから平根とすべきで、結局すべて鏃矢につく鏃なのである。 また、全長35.7cm・重量96g また、38cm・84gという、あまりにも大きくて重い雁股二本、及び31.2cmで86gの尖矢型

の平根透、42cmで96gの槇葉以上四本は実用ではなく奉納用である。かつ近世的な特徴が根元の篋被や蝮姑首等の加工にみられ、江戸初期以降のもの。ただし槇葉の鏃の蝮姑首には「信國」という刻銘が今回の調査で見えられた。 一方中茎が途中で折損して、5.8cm・全長11.9cm・重量12gの桜透の平根と、中茎9.5cm・全長16.2cm・重量30gの雁股、以上二本は、中世の鏃の可能性のある実用品である。 いずれも近世初頭までに武運を祈って奉納された鏃矢の鏃であろう。また鏃矢は流鏃馬にも使われ、享保四年神宝目録に弓二張ともあるから中世の御嶽の流鏃馬神事の射手二騎所用の弓具の一部であったかもしれない。

近世以来の記録に残された貴重な鏃であると共に、武神を祀る社・流鏃馬のある古社にふさわしい神宝と申すべきであろう。

計測調査、写真撮影には青梅市郷土博物館学芸員 伊藤博司氏・木下裕雄氏、北村和寛氏の協力を得た。